事例No.	2368
公表年度	R5
団体の属性	一般市
団体名	沖縄県糸満市

事例区分	地域活性化

タグ	・地域運営組織 ・関係人口 ・少子化・人口減少

事例種類	地域運営組織

事例内容・タイトル

住民自らの手による地域資源の発見・保存・継承の取り組み（沖縄県糸満市）

出典

平成28 年度地域運営組織の形成及び持続的な運営に関する調査研究事業事例集

【沖縄県糸満市】住民自らの手による地域資源の発見・保存・継承の取り組み

あるもの探しから「米須（こめす）村丸ごと生活博物館」宣言へ
未来につなげる米須の魅力

取り組み概要

■取り組みの目的

「米須」を子どもたちや孫の世代にも繋げていきたい。そのために、「人、自然、経済が元気なむらを作ろう」という目的のもと、地域住民自らの約束事である「米須地区環境協定」のほぼ全世帯での締結、あるもの探しで見つけた地域資源をもとに地区全体が屋根のない博物館という「米須村丸ごと生活博物館」宣言などによる住民相互の支え合いを進める。

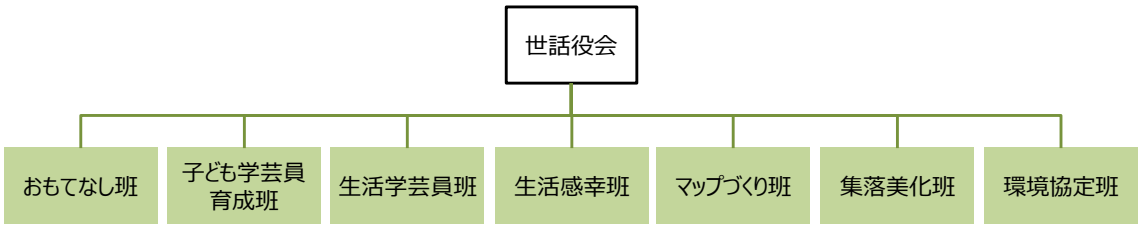
■取り組みの内容

- 「あるもの探し」による地域資源の発掘
- 地域資源を活用して「人、自然、経済が元気なむら」を作るための活動
- 自治会、女性会、青年会、子供会、老人会と市役所の連携による「米須農村活性化事業世話役会」の設置
- 地域と住民の約束事「米須地区環境協定」の締結
- 米須地区全体を「屋根のない博物館」とする「村丸ごと生活博物館」

■取り組み主体

- 「米須農村活性化事業世話役会」
- 糸満市役所
- 糸満市市民活動支援センター

取り組み体制



取り組みのポイント

1. ないものねだりから米須の「あるもの探し」へ

外部の専門家の気付きによる「あるもの探し」のスタート。何もない、そう思っていた地域に、実はとてもたくさんの宝物があることに気づいた米須の人たちは、たくさんの「地域の宝物」を探していく。

2. 住民と地域との約束「米須地区環境協定」の締結

地域にとてもたくさんの宝物があることに気づいた米須の人たちは、この地域の宝物を子どもや孫にも残していきたいと感じるようになった。地区の総会により議決された地域の宝物を引き継いでいくための約束、「米須地区環境協定」は、米須の人たち１人１人と米須地区の約束。ほぼ全住民がこの約束を取り交わしている。

3. 米須地区村丸ごと生活博物館宣言

「あるもの探し」で見つけた地域の宝物。この宝物を米須地区に来た人に少しだけお披露目。民泊等で泊まった子どもたちには、同じ世代の子どもが案内する「子ども学芸員」もいる米須地区の博物館。米須地区の全てがそのまま屋根のない博物館。

4. 世代をつなぐ地域での活動

米須の宝物を残していきたい高齢者。自分たちだけで頑張っても次の世代に引き継がれていかない。日頃の活動も、おじいちゃん・おばあちゃん、おとうさん・おかあさん、子どもたちの３世代で一緒に取り組む。地域の子どもは地域の宝。地域で育てていく。

取り組みによる成果	今後の展望
○地域住民自らが「あるもの探し」をすることで「ないものねだり」になることなく、地区への誇りが醸成されてきた。 ○住民個人と地区とが協定を締結することで、一人一人の地区への意識が高まっている。 ○地域全体で地域のために活動する取り組みにより、一部のメインプレイヤーだけではなく、住民全体が参画している。 ○これらの取り組みにより、米須地区出身で地区外に転出した住民が、結婚・出産を経て、育児のために米須地区に戻る例も出てきた。	○「人」「自然」の元気については構築されてきたものの、「経済」の元気を作るために、一層の取り組みが重要。 ○安定して持続的に多様な取り組みを行うためには、現行の「職を持つ人のボランティア」活動に加えて、常勤の事務局的な職員の配置が必要。 ○こうした体制の充実、他地域の展開を参考とした地域の様々な活動の多様化に取り組むことによって、地域における活動を継続・継承していく。

取組に至る経緯

「農村地域再生発見事業」

かつて、糸満市農村部はコミュニティ力の強い地域の一つで、各集落は自治公民館を拠点として婦人会や青年会などの自治活動が盛んであった。

しかし、1970 年代頃から、職業や価値観が多様化し、農業以外の職に就く若者が増え、婦人会、青年会などのコミュニティ活動が衰退の傾向にある。このままでは農村部のコミュニティはますます衰退し、集落の諸課題を自立的に解決することが困難になると推測される。

米須地区のコミュニティ活動は、他地区同様いささか衰えているものの、元気のあるうちに新たな時代に対応するコミュニティ創造の取り組みを行い、他の農村部の再生のモデルとなることが期待された。

具体的な取り組みとして、平成 21 年度より「農村地域再生発見事業」を米須地区において取り組みを始めた。2 年間で米須地区の自立的発展を目指して住民参加による「あるものさがし」を開催し、地域の良さを再発見する取り組みを行ってきた。平成 22 年度は、総務省「地域人材力活性化事業」、23 年度は地域総合整備財団（当時）「新・地域再生マネージャー事業」に採択された。この際、外部専門家として、「地元学」の提唱者であり、熊本県水俣市を中心に地域資源の「あるもの探し」と「村丸ごと生活博物館」の取り組みを進めてきた吉本哲郎氏を招聘した。

「人、自然、経済が元気なむら」を作る
ないものねだりから米須の「あるもの探し」へ

事業の目的は、「人、自然、経済が元気なむら」を作ることである。地域資源の活用については、ともすれば、「ないもの探し」からはじまり、地区にはなく、他地区にはあるものを作ろうとすることがある。これでは、他の地域と同じことをしているだけとなってしまい、「米須」の地域資源とは言えない。住民自らが、「あるもの探し」をして、地域の宝物に自らが気づくことで、地域への愛着を高め、地域の宝物を大切にしながら地域外にも発信していくことができる。

このため、一部の関係者だけではなく、多様な関係主体が一緒になって、取り組みを進めていくことが重要となった。もともとの事業の推進役は、糸満市、米須自治会、市商工会、市観光協会、外部専門家等だったが、具体的に取り組みを進めていく中で、自治会とは別に、自治会、女性会、青年会、子供会、老人会と市役所の連携による「米須農村活性化事業世話役会」を設置して、米須地域の取り組みを推進することとした。

住民と地域との約束「米須地区環境協定」の締結

こうした地域再生に向けての取り組みを進めていく中で、住民の意識向上が課題とされてきた。世帯でも、一部の住民でもなく、米須地区の住民全てが、米須地区の自然や生活環境を自分たちで守り、子や孫たちに届けていくため、環境に対する最低限の生活ルールを地区に住んでいる人たち同士で約束し合う「米須地区環境協定」が平成２３年５月、米須地区の総会で議決された。議決後、この環境協定をより多くの住民に締結してもらうため、世話役会のメンバーを中心に、米須地区の各家庭を戸別訪問し、協定の趣旨について説明の上で、協定締結の署名を求める活動を実施した。この取り組みもあり、米須地区の住民はほぼ全て、協定を締結することとなった。地域の約束事を、文字どおり、住民全員の合意を得た取り組みは、全国の取り組みの中でも希少な事例といえる。

この「米須地区環境協定」の内容については、各戸への配布だけではなく、米須地区の活動拠点である「米須コミュニティセンター」の入口及び米須地区の入口にも看板を掲示、地域内の住民だけではなく、地域外の人間にも、「米須地区は住民自分たちでこの約束ごとを決めて、自ら活動している」ことを宣言している。

≪「米須地区環境協定」の看板≫



米須地区村丸ごと生活博物館宣言

「地域の宝物を発見」し、「その地域の宝物を守る」約束をした上で、地域にあるもの全てが宝物という意識は住民内に高まっていった。一方で、こうした地域の宝物を活用するため、地域資源を活用したモニターツアーの実施、「子どもの案内は子どもが一番」とのことから、相互の学び合いを目指した「子ども学芸員」の育成、おもてなし料理の開発など、米須地区全体を、米須地区の「宝物」を「常設展示」する屋根のない「博物館」に見立てた「米須地区村丸ごと生活博物館」構想を着実に進めていった。この取り組みの集大成として、平成２３年１０月、「米須地区村丸ごと生活博物館」宣言が自治会長によって行われ

た。宣言により、米須地区の取り組みは、仕組みづくりから実践に移行する段階に入っていった。

世代をつなぐ地域での活動

世話役会は様々な米須地区の代表や有志により構成されているが、地区の行事やお互いの支え合い、見守りについては、住民のボランティア活動により支えられている。こうした世話役会が取り組んでいる様々な活動については、米須地区の「お互いに支え合う」強い地域力により成り立っている。また、米須地区の取り組みの特徴的な部分として、祖父母・父母・息子娘の「３世代」による行事への参画が挙げられる。こうした３世代ボランティアの取り組みについては、沖縄県内の他地域でも展開されているが、米須地区についても、こうした取り組みを進めている。

また、働き盛り世代が地域内外で仕事をしている間、その両親を始めとする地区の高齢者が子どもたちを見守るという地域の文化もあり、例えば、２０代で米須地区の外部に転出した地域出身者が、結婚・出産を機に、子育てのために、米須地区に戻ってくるということもある。

現在の取り組み

こうした経緯を経て、米須地区村丸ごと生活博物館の利用者は、平成 24 年度 139 名から直近の平成 27 年度においても 136 名と安定した利用状況となっている。博物館来訪者も、民泊した生徒・児童に加えて、大学の研究室、建築士会など多彩な来訪者が訪問している。海外からも、韓国からチェジュ大学の大学生が博物館の取り組みを視察した上で、海外の大学生からみた米須の魅力について提言を行うなど国内外との交流が行われている。

また、関連する取り組みとして、米須地区を花でドレスアップする「花いっぱい運動」の展開、那覇マラソンでのおもてなしとして「米須産サトウキビジュース」の提供（大人が作り、子どもがランナーに手渡し）、米須村丸ごと文化祭（老人会文化展、米須の昔の写真展、メインストリートである「馬場」を活用した乗馬体験及びプレパーク、馬場での灯籠によるライトアップ、子どもが主体となった屋台、音楽祭等、世代、様々な関係組織が一体となった米須地区の総合祭）の開催等、多岐にわたる活動を展開している。また、活動に参加できない住民向けに、米須地区の活動を定期的に周知する広報誌「米須くみしんまい」も発行している。

これらの取り組みが評価され、沖縄県から「沖縄まちなみミュージアムの予定地区指定」、「風景づくり人材育成事業採択」による古木デイゴの復活、馬場沿い外壁擁壁の修景等に対する支援も行われている。

更に、糸満市では、「米須地区環境協定」の取り組みなど、米須地区住民の地域を守る活動を支援するために、米須地区を「糸満市風景づくり計画」において、米須地区を風景づくり重点地区に指定し、米須地区における開発行為には市の許可を必要とする仕組みを平成 28 年度から実施している。住民の活動と思いが、行政を動かし、行政も米須地区住民の思いに寄り添った政策を展開している。

糸満市では、市内全域を対象として、市民の提案による事業実施を支援する「市民活動支援補助」制度を実施し、市民活動支援として、案件により、10 万円、30 万円の支援を行っている。加えて、市民活動を人的に支援する仕組みとして、市独自の中間支援組織である「市民活動支援センター」を設置し、市民活動をサポートしている。

「市民活動支援センター」は、公募により NPO 法人が運営受託しており、市民の視線にたった組織の形成や運営に関するアドバイス、補助金の活用、市と住民との間をつなぐ取り組みを実施している。

今後の展望

これまでの取り組みを継続して展開しつつ、更なる新たな地域資源の「あるもの探し」に取り組んでいく。

運営上の課題としては、「人」「自然」の元気については構築されてきたものの、「経済」の元気を作るために、一層の取り組みが重要とされている。村丸ごと生活博物館のガイドも１回 300 円と設定しているが、ガイドの報酬はほぼ無償、おもてなし料理についても 1，500 円だが地域の食材を主に活用していることから、時によっては、食材費も賄うことができない場合もある。

≪おもてなし部会メンバーによる「おもてなし料理」≫





こうしたことから、「村丸ごと生活博物館」の活動に、更に付加価値を加えた上で、より一層の経済効果も生み出せるような取り組みの展開も検討されていくこととなる。

また、現在、世話役会の運営は、他に職を持つ住民自らが行っているが、本業が多忙な

時期には十分な活動ができないことに加えて、日中の連絡調整や新たな事業講演等に制約があることから、財政的な課題が解消されれば、専従の常勤職員の採用も望まれる。市としても、米須地区に居住する市役所職員を「地区担当職員」として、部署を異動しても継続して米須地区と市役所の橋渡しを行うこととしているが、市全体の取り組みとしても、公民館やコミュニティセンターを拠点とした地域の活性化、米須地区の取り組みの他地区への展開などを検討している。

また、世話役会においては、県内外の地域活動についても視察を行っており、他地域の先進的な取り組みを米須地区にも取り入れることにより、米須地区の活動の充実を図ることによって、地域における活動を継続・継承していく。

≪米須コミュニティセンター≫









※公民館から市長部局に移管され、多様な団体が活用する拠点となっている。室内には、地区が受けた表彰、新聞切抜き等も掲示されている。